SPARC Japan セミナー2022
「電子ジャーナルの転換契約とAPC問題で変わるオープンアクセスの現状と課題」

パネルディスカッション

池内 有為　（文教大学）
山形 知実　（北海道大学）
大隅 典子　（東北大学）
西岡 千文　（国立情報学研究所）
池松 克昌　（高エネルギー加速器研究機構）
小泉 周　（自然科学研究機構）
小野 浩雅　（情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）
平田 義郎　（東京大学）
林 和弘　（科学技術・学術政策研究所）

●**池内**　事前の打ち合わせでは、パネルディスカッションは質問に対する回答からゆるゆると入っていこうと考えていたのですが、なかなかの熱いご講演に触発されて、初めから飛ばしていきたいと思います。初めにグリーン OA の話が出ましたので、まずはそこから始めます。

頂いた質問を読み上げます。「グリーン OA を推進したい図書館や大学の意向は理解できますが、共著者全員から同意を得るなど機関リポジトリへの搭載に関する手続き、出版社版と機関リポジトリ版にアクセスが分散することで論文への被引用数に影響がないのかなど、研究者にとってはそれほど魅了あるオプションとは思えません。どう思われますか」という率直な質問を頂いています。

また、Beamer さんへの質問で取り上げられなかったのですが、「研究者にリポジトリでの成果発表を促すには、リポジトリを使うことが研究者への評価にも結び付く必要があると思いますが、評価方法や指標がそのように変わることは可能でしょうか。ブダペスト・オープンアクセス・イニシアティヴ（BOAI）が提言した研究評価の改革も、実効性を持つでしょうか」というコメントも頂いています。

機関リポジトリとは多少違うのですが、小野先生の発表では、APC（article processing charge）は非常に高く、プレプリントでいいのではないかというお話がありました。プレプリントは PubMed に収録されたり、

Web of Science にもサイテーションインデックスが載ることになったりと、評価に結び付いているからこそプレプリントでいいということなのか。そのあたりの率直なところをお聞かせいただければと思います。

●**小野**　私個人としてはプレプリントが PubMed に載ったのは大きな一石を投じる流れだと感じたので、少し過激でしたが最後に一言載せました。ただ、そうなったからといってすぐに評価の仕組みが変わるかについては懐疑的に感じています。今ちょうど頂いた、「やはり医学系の研究者にとって PubMed に引っかかるかどうかは大きいのでしょうか」というご質問も、まさにそういうことだと思います。

Google 検索で出てこないものはこの世に存在しないも同然であることと同じように、PubMed に出てこないものはないも同然というところがあります。PubMed に出るということは、「プレプリントというものがあるのだ」と（初めて）知る人も中にはいると思います。そこで一つ大きく石が動いてくれると、これも評価に入れよう、業績として加えよう、となるかもしれません。もう少し加えると、プレプリントを使って SNS 的に大勢が集まってオープンレビューをするなどという話が出てくるとさらに変わるのではないかと思います。

物理の分野では元からプレプリントがたくさん出ていたということなので、そこの実情も個人的には伺いたいです。

●**池内**　キラーパスをありがとうございます。それではご指名の池松先生、よろしくお願いいたします。

●**池松**　私が高エネルギー物理学（HEP）の世界に入ったのが 1990 年代の後半で、研究室に配属されたときに最初に先輩に聞くのは、他の人の仕事をどうやって知るのかということでした。つまり論文の読み方です。当時、既に私たちの分野ではプレプリントが深く浸透していて、まずは米国ロスアラモス国立研究所のプレプリントサーバにアクセスしなさいと言われていました。まだコーネル大学図書館に運営が移る前のプレプリントサーバです。

当時は、論文をできるだけ早く読むためにはその方法が一番いいと誰もが思っていました。ピアレビューされた論文は図書館に行ってコピーしなければいけないような時代で、それが長く続いていました。とはいっても、ピアレビューの論文が必要なことは共通の理解でしたから、欧州原子核研究機構（CERN）の所長が 2007 年に、コンソーシアムを組んで OA 化を目指そうと提言し、実際にプロジェクトが走って 10 年近くたちます。

今でもプレプリントが読めるのだからそれでいいではないかという考えの人もいるのですが、そうではないような気がします。少なくとも SCOAP[3] では 90%の HEP 論文が OA 化されていますが、それならばやはり最終稿を読みたいと思います。

プレプリントサーバだけでは駄目な理由も明らかで、誰が正当性を与えるのかという問題もあります。私は実験分野の研究者ですので本日は実験の話をしましたが、理論分野の場合は 1 名や 2 名で書く論文も大量にあり、博士後期課程 1 年生ぐらいの若い学生からでも、とてつもないアイデアが出てくる可能性があります。プレプリントに載っている論文は、著者が有名な人や大先生が共著者にいればある程度内容の妥当性を判断できますが、無名の研究者の論文がプレプリントで発表されても、そこは分からないことが多いと思います。論文の妥当性を保証するのは、やはりピアレビューの役割ですので、SCOAP[3] のような形の OA 化は非常に有意義であると思います。

●**池内**　ありがとうございます。登壇者の皆さんが深くうなずきながら聞いておられました。情報共有という意味では、もちろんプレプリントは速報性もあり一定の意義があるものの、やはり査読を経た論文をきちんと入手できる環境が重要であると受け止めました。

では、機関リポジトリについて、グリーン OA に関

するコメントをパネリストの皆さまから頂ければと思います。まずは大隅先生、いかがでしょうか。

●**大隅**　私にとっては、手間さえなければ喜んでという一言に尽きます。研究者は論文をアクセプトされた段階で一仕事終わった感がかなりあって、そこからプレスリリースなどをしたりするものの、頭の中では次のまとめに向かっていたりします。そのような中で実際はいろいろと面倒なことを自分でやらなければいけないのは、心理的なハードルとしては非常に大きいと思います。

●**池内**　ありがとうございます。西岡先生のご講演でも、著者に許諾を取る大変さについてお話があったと思いますが、いかがでしょうか。

●**西岡**　私の講演ではグリーン OA についていろいろ申し上げました。ご質問いただいている研究評価につながるのかという点についてですが、前職の京都大学での経験では、機関リポジトリのログを調べていたら、PubMed には LinkOut という PubMed と機関リポジトリをリンクさせる機能があって、その LinkOut 機能がきちんと働いている論文は非常にアクセスが多かったということがありました。ですので、分野ごとの個別の対応は非常に大変ではありますが、機関リポジトリに搭載されているコンテンツをより評価につなげ、より魅力的なものにしていくためには、各分野で使われている主要なディスカバリープラットフォーム等と連携を進めていくことが重要だと考えています。私自身も現在、国立情報学研究所（NII）に在籍しておりますので、そのようなことを考慮した上で研究開発に取り組んでいきたいと考えております。

●**池内**　ありがとうございます。より魅力的なシステムにしていくというメッセージと受け止めました。では、小泉先生はいかがでしょうか。

●**小泉**　2 点あります。一つは、グリーン OA が本当にサステナブルなのか、私は疑問に感じています。グリーン OA を進めるためには図書館員の人件費が必要です。大隅先生もご指摘されましたが、人の時間をそれだけかけているわけです。そしてサーバにもお金がかかります。日本では人件費はただだと思われていて、図書館員はただ働きをしてくれると思っていますが、それは違います。人件費まで考えると、転換契約をしてゴールド OA にした方が、1 本当たりの費用は圧倒的に安くなります。そう考えると、人件費をそこまでかけてやるのか、ただ働きさせるのかということは本当に考えなければいけません。ただ働きしてくれる人はいくらでもいると考え、それをサステナブルだと言うのは、あまりにも暴論だと私は思います。

もう一つは、プレプリントに関してです。ビジネスモデルが急速に変化しています。例えば、Social Science Research Network（SSRN）という世界最大のプレプリントサーバは、Elsevier 社に買収されましたし、Wiley 社は恐らくダイヤモンド OA を目指しているのか、Wiley 社独自のプレプリントサーバを立ち上げました。arXiv はそのままだとは思います。このようにプレプリントも含めたビジネスモデルが変化していく中、日本としてどうするのかを考えなければいけない段階に来ていると思います。

●**池内**　ありがとうございます。図書館員の人件費という観点は、図書館内部からはなかなか出てこないご発言で、「そうだそうだ」と賛同されている図書館員の方々も大勢いらっしゃるかと思います。ではどうするかという大きい話は、ぜひ後半に熱く語りたいと思います。それでは平田さん、お願いします。

●**平田**　JUSTICE の立場では、ゴールド OA を中心に対応しておりますので、内部でよく話が出るのは、とにかく日本はグリーン OA の国なのだということです。政府もそう言っていますし、出版社からもそう言われています。ただ、他の国を見るとゴールド OA が進展

しているので、何もしないわけにはいかないだろうということで、グリーン OA とゴールド OA の両方を見つつ、JUSTICE としてはゴールド OA を主に見て活動しています。

また、プレプリントに関しては、arXiv も内部的には資金不足だというような話も聞いていますので、きちんとサステナブルになればいいなと思います。

●**池内**　ありがとうございます。グリーン OA と言いつつも、実際には APC も支払っているというところが現時点の日本の状況かと思います。では、山形さん、図書館員の立場からはいかがでしょうか。

●**山形**　私は今、リポジトリ担当の部署におり、実際に学内の著者の方々に著者最終稿を頂けませんかという依頼をしている、まさに人件費をかけている立場なので、本当に人件費に見合っているのかという点は非常にうなずくところでした。最初にグリーン OA が始まったときの、それでシステムを変えられるのではないかという今の転換契約と同じような期待があったときのルーティンがそのまま来てしまっていることは、はっきり見直すべき時期に来ていると思います。

一方で、大学の保証の付いたサーバであり、永続性があるということで、リポジトリを非常にうまく使う先生も出始めています。本日の主な話とは少しずれますが、例えば観光学の先生で、市町村の方と共同セッションやイベントをすることが研究活動そのものであるような場合、自分のホームページや大学のサイトではなく、そのときの発表資料などをライセンス付きでリポジトリに入れると、永続性を持って、しかもオープンで即時掲載ができます。図書館にご相談いただければそれができます。プレスリリースに来てくださった報道関係者に参照していただくことができますし、ご自分の成果の PR に使うという方も出てきています。リポジトリがいい意味で浸透してきた例もあると思っています。

●**池内**　ありがとうございます。日本の機関リポジトリは CiNii Research に収録されていて、Google でもヒットするところが強みだと思います。特に日本語文献です。大隅先生から ChatGPT を賢くするため日本語のものに力を入れているというお話がありましたが、そういう意味での貢献は確かにあると思います。一方、国際的な発信力や大学のレピュテーションに結び付けるという部分は難しく、そこのコストパフォーマンスをどう考えるかは大きな課題だと思いました。

次の話題です。小泉先生に「機関リポジトリの何か新しい機能の一つとして、西岡先生のおっしゃったオーバーレイ・ジャーナル・プラットフォームという役割がありますが、どう思われますか」という質問が来ています。

●**小泉**　西岡先生のお話を聞いて勉強したところだったのですが、先ほども申し上げたように、そこもビジネスモデルがどんどん変わってきていて、むしろ出版社が先手を打ってプレプリントサーバを買収している状況です。特に Wiley 社のモデルは、恐らくオーバーレイジャーナルを逆に出版社が主導しているようなものだと思います。プレプリントに投稿させ、そこから Wiley 社のジャーナルに引っ張ってくる。Wiley 社はそこで全部を完結させるので、一度リジェクトされても次の Wiley 社のジャーナルにはそのプレプリントから行けるという、研究者抱え込みの手段として使われることになると思います。私も、研究者としては抱え込まれる方が楽ですので、むしろ抱え込んでほしいと。でも、それがいいのかどうか、日本としてどうなのかは考えなければいけないなと思います。

●**池内**　ありがとうございました。やり手の出版社からの囲い込みは間違いなくあって、それをうまく乗りこなしていくという考え方も大事なのかなと思いました。

小泉先生への質問が続きます。「個々の研究者が論文の執筆主体である以上、大学が主人公にはなれない

のではないでしょうか。例えば大学が、ここには投稿するなといった制約をかけたとしても、研究者から反発されるだけなのではないでしょうか」ということです。転換契約を結んだ際に、どうしても契約先のジャーナルに縛られるかと思いますが、この点はいかがでしょうか。

●**小泉**　研究者としては「お金のかからないこちらに出しなさい」と大学から誘導されるかもしれないという懸念があるかと思います。もちろん研究は自由なので、プレーヤーとしての主人公は研究者です。大学が主人公だと話したのは、研究者の研究環境を整えるための主人公は大学だという意味で、研究の主人公はもちろん研究者です。そこがうまくインタラクトすればよいと思います。

ただ、研究者個人個人が自分の研究環境のために出版社と闘うのは違うと思いますし、できないですよね。私は出版社とはむしろ闘わず巻き込まれたいです。個々の研究者は戦えませんので、やはり大学が研究環境を整える主人公として、しっかりと出版社と対峙する必要があって、そこの切り分けだと思います。

●**池内**　ありがとうございます。転換契約に対する研究者からのリアクションということで、大隅先生、いかがでしょうか。

●**大隅**　最初は一体何をしているのだという感じだったと思います。大学間で運用が違うところに少し混乱があるのではないかと思います。それは仕方ないとは思うのですが、ある大学では無料で、東北大学では50%支払っていただくということでは、大学を移る際に問題になるかもしれません。

●**池内**　ありがとうございます。研究者側が 50%負担するということはご講演でも説明がありましたが、全額負担とすればよかったのではないかという質問も来ています。

●**大隅**　本学の財務部は、著者から徴収した APC の50%分は、余分に入ってきたものとして計算して、追加料金の支払いや講読料への補填に充当します。東北大学だったらこのぐらいのジャーナルが読めるというのも研究者にとっての大事な環境なので、私たちはパッケージで買っているジャーナルタイトルをできるだけ減らさないために、Publish & Read の Read の部分を維持するために補填するという戦略を取りました。

●**池内**　ありがとうございます。本日は、これから転換契約に取り組まねばと考えている機関の方も多数視聴されていると思います。転換契約の難しさはいろいろとあるかと思いますが、実際の大変なところや勘所について、共有いただける範囲で教えていただけるとありがたいです。小泉先生からお願いできますか。

●**小泉**　私自身は大学現場で転換契約を進めたわけではなく、大隅先生をはじめ大学図書館の方々が本当に努力されたと思います。先ほども申し上げましたが、図書館がやりましょうと言っても無理な話で、図書館と URA、さらに大隅先生のような執行部の方々の理解がないと、お金が安くなるかならないかの話にとどまってしまいます。お金だけの話ではなく、これは大学としてビジビリティを高めるための一つの方法であることを理解していただかないと、残念な議論になってしまって進まないと思います。

●**池内**　ありがとうございます。大隅先生はいかがでしょうか。

●**大隅**　最初にファーストペンギンとして（転換契約の）海に飛び込む四つの大学が決まったのは、異なる規模や特性を持つ大学が一緒に取り組むことで、ノウハウがさらに広がるのではないかと考えた経緯があります。なぜ国立 7 大学が最初にやってみなかったのかという声もありましたが、いろいろなタイプの大学が組むからこそ、その後の広がりに早くつながると私た

ちは考えて、この 4 大学（東北大学、東京工業大学、総合研究大学院大学、東京理科大学）となりました。

本当に図書館の方々はご苦労されたと思います。私のところにつらい話は一切上がってきませんが、資料の整いぶりや、いろいろな計算がされているのを見れば、そこにどれだけのエフォートがかかっていたかが分かります。ゼロから始めるという意味では全く簡単なことではなかったのですが、後から入ってこられる方々にとっては、既にある程度地ならしされている部分もあり、契約のひな形もあるわけですから、それほど大変ではないのではないかと思います。やはり大学の中での理解を得ることに尽きると思います。

●**池内**　ありがとうございます。漱石の羊羹を作られたように、「このようなことをやっている」と伝えるのは意外に難しいものです。論文の発信力で損をしているというお話もありましたが、転換契約やリポジトリ運営を行っていることを発信することについて、よく考えていかなければいけないと考えました。

では次に、研究者の立場から、転換契約への期待と、特に APC で実際に「今ここにある危機」として苦しまれているあたりを、小野先生からお聞きできますか。

●**小野**　私は恥ずかしながら、この SPARC Japan セミナー企画ワーキンググループに入って話を聞いている中で転換契約というものを知りました。そのような方は結構多いのではないかと思います。

東北大学を含め、4 大学の転換契約については確かヘッドラインを見たと思いますが、あまり深掘りしていませんでした。よその大学など自分とあまり関係ないところの話になると「そういうものなのかな」程度の認識となってしまいます。自分の所属している組織や大学が、国の予算をもらったりすることでまとまって取り組むようになれば、全体として動いていく印象はあります。

●**池内**　ありがとうございます。転換契約という名前にも分かりづらさがあるかもしれませんので、論文投稿費用が安くなることが伝わるような名称が付けられるといいのかなとも思いました。池松先生や西岡先生にも伺いたいと思います。

●**池松**　私たちの分野では、SCOAP³ により APC がかからない状態で OA が実現できています。10 年ほど前に OA 化の原資について話が行われたときには、誰かがコストを負担しなければいけないのだから「リダイレクト」という形になっているのだと研究者の間でも議論されていたのですが、これだけ時間がたってしまうと、なぜ私たちの分野の論文は著者が APC を支払っていないのに OA になっているのか知らない人が相当増えています。

SCOAP³ のモデルでは、CERN が全世界の（HEP 分野の）論文シェアを計算し、それに応じた拠出金を各国が集めることになっているのですが（現在の日本のシェアは 6.5%）、実は、集金方法は各国に任されています。ヨーロッパ諸国、特に小さいヨーロッパの国の場合は政府が丸々出すという決断をしているところもあります。日本の場合はなかなかそのような議論にはなりにくいこともあり、このプロジェクトが立ち上がった当初から、図書館のご理解によって今までの購読料をそのまま付け替えてもらう形になっています。とはいえ、充足率は 80%ぐらいです。不足している 20%については、胴元である CERN が巨大なバッファーになっていることもあり、恥ずかしい話ではあるのですが支払ってもらっている状態です。

APC を支払わないでも OA 化が実現されているという SCOAP³ のモデルをもっと研究者に広く知ってもらわなければ、不足分の負担をお願いすることができなくなってしまいます。（日本における）SCOAP³ の課題はそこにあると私は感じています。

●**山形**　コメントありがとうございます。図書館職員としては、購読モデルの悪夢のようなものが頭に浮かんでいます。それは、図書館が購読モデルの交渉と整

備を進めた結果、お金が幾らかかっているかが個々の研究者に見えなくなってきてしまったことです。これは西岡先生のご発表の中で価格感応度という言葉で表現してくださっていましたが、それが転換契約によってまた下がってしまうのではないか、今度はなぜ論文を出せなくなったのかと言われるのではないかと懸念する図書館は多いかもしれません。小野先生が、「50万円自腹で支払ったが値上がりしていた」と気にされていましたが、それが見えなくなれば幾らだろうと構わなくなってしまうという懸念があると思います。

それを踏まえて、西岡先生にはダイヤモンド OA の可能性について、コメントいただけるとありがたいです。

●**西岡**　今回の 10 分間の発表では、機関リポジトリの将来像の一つとしてダイヤモンド OA、特にオーバーレイジャーナルについてお話ししました。先ほど（平田様のコメントで）、arXiv のプレプリントサーバは予算的に厳しいようだとのお話がありましたが、ゼロコストで行っていることではないのでその辺のコストを考慮し、今は特に欧州で活発に報告書などが出されているので、そのようなところを研究者も意識する必要があるかと思います。特に、現在出版社が提供しているサービスの中には過剰に贅沢なサービスもあると思うので、きちんとコストを分配して必要なサービスを取捨選択しなければ、持続可能な学術出版の将来につながらないと考えています。

●**池内**　ありがとうございます。池松先生のご講演では、SCOAP³ のインフォグラフィックを示されて、CERN は、プロジェクトを分かりやすく説明するツールを作るのが上手だという話がありました（図 1）。研究者の皆さんに実情を伝える役割もありますし、見直しという観点でも非常に有効だと考えられます。資料をご紹介いただき本当にありがとうございました。

●**山形**　ご質問が一つ来ています。先ほどのものに近いのですが、「日本では公的なものは当然政府が整備してくれるものと考える人が多いのですが、機能や国際標準への対応ができているのか疑問です。また、SSRN のような買収を防ぎたいのであれば、arXiv やオープンアクセス学術誌要覧（DOAJ）などにフリーライドせず、SCOSS（The Global Sustainability Coalition for Open Science Services）などを通じてきちんと支援すべきだと思います」ということです。この質問については、林先生、ヘルプをお願いします。

●**林**　おっしゃるとおりで、特に日本ではインフラは公的なものが整備しますが、一方で、箱物行政になりやすい国ですので、それでとどまっています。小泉先生が、「そこに魂を入れる」という話をよくされていますが、まさにその部分の議論を今回させていただいていると思います。

政府の方も今、かなり本気で OA を検討しています。OSTP Mandate を契機として、総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）で本格的に議論されています。私も木曜会合や非公式会合等に出席させていただいていますが、CSTI レベルでは初めて OA のことを毎週のように議論しています。大隅先生のご紹介にもありましたように、G7 に何らかの方針を出すということで動いてはいます。政府は政府で取り組んでいます。

しかし、繰り返しますが、そこに魂をどう込めるか。そこは主体者である研究者の話です。大学だけでなく研究者コミュニティでもある学協会の役割も非常に重要だということも補足させていただきたいです。とこ

（図 1）

ろが、図書館の方々が、本来主体的にやらなければならない研究者のために一生懸命やっていて、しかも著者最終稿をもらいにいくと怒られるというのは大変皮肉な状況とも言えるのです。

小泉先生の話のとおり、転換契約は研究者と図書館の方々が改めて OA 問題を議論する非常にいい場だと思います。それを乗り越えていく先に大学の将来もありますし、研究者コミュニティの将来もあるのではないかと考えています。

●**池内**　ありがとうございました。国の役割としては、やはり APC 支援の部分を強く期待したいところです。大隅先生のご発表の中で、助成機関による研究成果の即時 OA の義務化や、国による APC の支援という話があり、日本の研究者が公表する論文の APC 所要額は年間 210 億円という具体的な数字も出てきました。それが Read & Publish で半額まで落とせるのではないかということで、そこはまさに一緒に頑張っていくところではないかと捉えたのですが、いかがでしょうか。

●**大隅**　そのような話をすると、ではその 100 億円をどこから持ってくるのか、それは科学研究費から切り取ってもよいのかと必ず言われます。そうであっても、配分の仕方をどう変えるかはとても大事なことだと思いますし、選択と集中が行き過ぎているところもあるかもしれませんし、そういうところを見直すなど、いろいろなことができると思います。

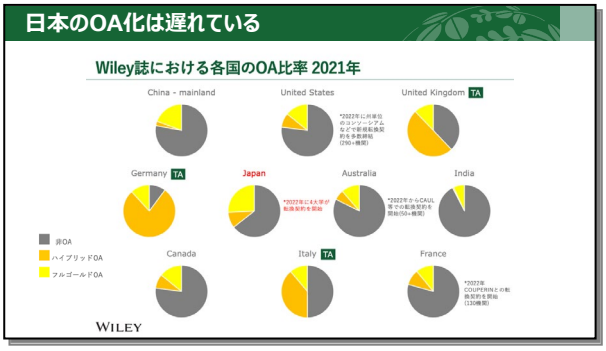
このようなコスト計算はしたことがないのですが、例えばコロナ禍に会議がオンラインになりました。旅費をかけずにオンラインで行われるようになって、一体どのぐらいコストが浮いているのでしょうか。会議の資料も印刷しなくなりましたので、印刷のための人件費も浮いているはずです。だから本当はどこか取ってこられるところはあるのではないかと思います。小泉先生にはまたお知恵を授けていただけるとありがたいです。

●**池内**　もちろんまとまった金額としては大きいのですが、まだまだ投資できる余地もありますし、これをやることで日本の研究力や大学のレピュテーション向上にどのような効果があるかということをこちらから分かりやすく伝えていく必要があると感じました。

●**大隅**　アメリカの場合は規模や構造などが日本とは大きく違ってしまいますが、例えばドイツではビフォアとアフターでどうなったのか検証したり、イタリアはこうだ、フランスはこうだと示したりと、日本の参考にするときにはヨーロッパの国の方が比較しやすいかもしれません。

●**池内**　そうですね。日本と各国の OA 化を比較した円グラフ（図 2）は非常に分かりやすくて良かったと思います。また、実際に東北大学で転換契約後に OA 出版率が 9%から 42%に上がったというデータはとてもインパクトがあり、「42%羊羹」を売り出してもいいのではないかと思うほどでした。このようなことを私たちの間でも共有し、伝えていくことは本当に大事だと感じています。

●**大隅**　本日は最初から関心のある方が主に聞いていらっしゃると思いますが、もっと裾野を広げなければ浸透しませんし、実際に運用も難しいです。ですから、林先生がおっしゃったように、もっと学協会で、APC 問題や転換契約、今取り巻いている学術情報流通の問題、すなわちジャーナル問題について扱われるとよいとずっと思っています。それが大学を超えた形での情



（図 2）

報共有にもなって、「あの大学がこういうことをしているのだったら、うちでもやってもらいたい」というようなことにもつながっていくのではないかと思います。

●**池内**　ありがとうございます。本日登壇しているメンバーはその伝道師ということで、発表を聞かれている皆さまにも、ぜひぜひ草の根運動的に広げていただければと感じました。

平田さんへの質問で、「JUSTICE は大学図書館のコンソーシアムですが、今後、転換契約を目指して URA や研究者の方々とも協働する交渉主体となっていく可能性はありますか」ということですが、いかがでしょうか。

●**平田**　JUSTICE が OA に関するロードマップを作ったときには、JUSTICE の活動だけではなく、研究者やステークホルダーの方と協力しなくてはいけないという形で出しています。ただ、なかなかそれが進まず、JUSTICE 自体がそうなっていくのは、大学図書館のコンソーシアムという形からするとなかなか難しいだろうと思っています。日本学術会議から、契約主体になる組織の創設についての提言があったと思うのですが、そのようなかなり組織的な改変が起こらなければ難しいと思います。

条件を整えるための交渉をしていて一番悩ましいのが、自分が契約をするかしないかの決定権を持っていない中で交渉しているので非常にやりづらいことです。決定権を持つところが交渉をするのが一番強いので、そういう提言などを見てうまく組織改編ができればよいと思っています。

●**池内**　ありがとうございます。小泉先生のようにうまくオンラインお茶会を開催できるといいのですが、図書館や個々の立場からすると上層部を巻き込むことはとても難しいです。大学一丸となってやるためには、まずはそのような仕掛けをしていくことも大事だと思います。

あっという間にパネルの時間が終わってしまいそうですので、最後にお一人一言ずつ、自由にコメントを頂ければと思います。

●**小野**　今回のセミナーに参加して、私もいろいろと勉強させていただきました。私はプレプリントの話などもしましたが、転換契約と OA という文脈で、査読をするか否かという話が一部出てきていました。今は査読を無償でしているわけですが、あれがいいのかというのは昔から言われている問題です。出版社と研究者が向き合ったときに、交渉と言ったら変ですが、それはやれる余地があるのかなと、今回皆さんのお話を聞いていて感じました。

組織として、大学として APC 等をどうやっていくかというところも当然ありますが、一方で研究者が論文を出すときの心構えもあります。論文を投稿していると査読を頼まれて、これを断るとリジェクトされるのではないかという変な心が働いて、やりたくないけれど仕方がないと思ってしまうところがあり、フェアではないと思います。ブラックボックスな部分になっていますが、そのあたりもうまく交渉の材料にできればいいと思います。

●**平田**　大隅先生の講演の中に APC を支払えない方がいるという話がありましたが、APC 問題は海外でも南北問題のような形で問題になっています。ただ、国内であれば何かしら解決方法があるのではないかと思います。

私の発表の中では財源が知りたいという話をしました。大隅先生も必要経費が 210 億円という話をされていましたが、今は外部資金で支払っているものが多いはずですので、実際に 210 億円の追加は必要ないのではないかと思います。そこの調整がうまくできればある程度のお金は世の中に出てくると思うので、財源の調査ができればいいと思います。

●**小泉**　私は大学が主役で交渉すべきだと申し上げま

したが、池松先生が紹介されたような CERN など、国際的な学会、学協会が面倒を見るのも健全な姿だと思います。でも、日本の文脈では主役は大学かなと思って本日は話しました。ただ、いろいろな可能性があるので、それらについて検討できればいいのではないかと思います。

●**池松**　SCOAP³ は、現在も学術情報流通における壮大な実験を続けているところです。これから Phase 4 の議論が始まるのですが、少なくとも日本では図書館の皆さんのご協力が必要不可欠です。極端なことを言うと、HEP 論文の多くが既に OA 化されているのですから、フリーライドしようと思えばどこの図書館もできるわけです。それにもかかわらず、（日本では）2022 年 12 月現在 81 機関が SCOAP³ の理念に賛同してくださっているというのはすごいことですので、ぜひ今後ともご協力をお願いしたいです。

●**西岡**　本日は機関リポジトリという立場からお話しさせていただいたのですが、日本の機関リポジトリの強みとしては、非常に数が多く、諸外国と比べて非常に分散型だということです。集中してしまうと将来買収されてしまう可能性があるという話題も少しあったと思います。分散型である分、連携が複雑になるところがあるので、そういったところをより魅力的にできるように、NII に身を置いている者として取り組んでいきたいと考えています。

●**大隅**　結局のところ、転換契約や APC など専門用語がたくさん出てきますが、知のインフラをみんなでどううまく支えるかという問題だと思います。いろいろ迷ったら、いつもそこに戻って考えることを忘れないようにしたいと思いました。

●**池内**　ありがとうございます。OA にはさまざまな課題がありますが、論文を書く人にとっても、読む人にとっても―読む人には機械も含めて―、学術情報をうまく巡らせていく方策を今後も考えていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。